

Title	歴史人口学におけるミクロとマクロ : 日本およびドイツ語文化圏における'Historical demography'の比較
Sub Title	Mikro-und Makroebene in der historisch-demographischen Forschung : die 'Historische Demographie' Japans und die des deutschsprachigen Gebiets im Vergleich
Author	村山, 聡
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1990
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.83, No.1 (1990. 4) ,p.176- 190
JaLC DOI	10.14991/001.19900401-0176
Abstract	
Notes	書評論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900401-0176

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歴史人口学におけるミクロとマクロ

—日本およびドイツ語文化圏における

‘Historical Demography’の比較—*

村山 聡

1. はじめに
2. 国際比較における機能分析的手法
3. ミクロの構造分析的手法
4. ミクロ・デモグラフィーとマクロの社会構造
 - 4-1. 「歴史民勢学」と文明システム
 - 4-2. 人口史 (Bevölkerungsgeschichte) と歴史人口学 (Historische Demographie)
 - 4-3. 地域社会構造史とミクロ・デモグラフィー
5. おわりに

1. はじめに

1964年にゲント大学で歴史人口学にめぐりあった速水融は、その後25年を経過した現在、自

分の研究分野を「経済史、社会史、人口学の交錯した分野⁽¹⁾」と回顧している。確かに彼の研究を振り返ると、その表現は正しい。しかし、初期の段階においては、経済史にその重点があったように思える。実際、1968年5月に「経済史における人口」という共通論題の下に開かれた、社会経済史学会大会第二日における速水の「近世日本経済史研究における人口⁽²⁾」という報告から、彼の歴史人口学は、当初、特に「経済史」との関連が意識されていたことがわかる。しかし、その後の20年の経過において、人口史研究は、より広い研究領域へと向かい、むしろ「社会史」研究としての位置づけに比重が置かれる

* 本稿は、速水融・斎藤修・杉山伸也編『徳川社会からの展望、発展・構造・国際関係』同文館1989年（以下では『論文集』と省略）に収められている、主に歴史人口学に関するいくつかの論文を、ドイツ語文化圏における人口史的あるいは歴史人口学的地域社会研究の傾向を念頭に置きながら、批判的に検討することを課題としている。従って、本稿の主題に組み入れることのできなかつた、その他の論文についてはコメントを控えさせて頂いた。その意味で本稿は、論文集全体を書評するという形態をとってはいない。しかし、この論文集に収められている諸論文は、「人口史」「経済史」「社会史」の三つの学問領域に分類することが可能であり、この本全体の序論と見なされる「第一章徳川社会研究の現状」を読む限りにおいても、「発展」「構造」「国際関係」という三部構成には論理的必然性はなさそうである。それは、この論文集が速水融氏に対する還暦記念論文集という形態をあわせもっているからであり、『徳川社会からの展望』と題されるにもかかわらず、イギリスの都市人口史に関する論文も収録されている。その点からも、本稿では速水氏が最も力を入れている日本の「人口史」に直接関係する論文のみを取り上げることにしたが、それも書評論文として、ある程度正当化されるであろう。また、以下の本稿では、特別な場合を除き、敬称を省略している。なお、ドイツ近世社会経済史を専門とする筆者には、日本の研究状況について、重大な見落としや誤解があることが当然予想される。筆者としては、この論考に対して、専門家諸氏から忌憚りの無い御叱責および御教示が得られることを願う。

注(1) 『論文集』(速水氏への還暦記念論文集の形式がとられているもの一非売品)巻頭25頁。

(2) 速水融「近世日本経済史研究における人口」社会経済史学会編『経済史における人口』慶應通信1969年3～14頁。

ようになっている。⁽³⁾

それに対して、歴史人口学の分野においては後発的なドイツ語文化圏においては、その導入の当初より社会史あるいは地域史としての位置づけがなされていた。また、すでにフランス・イギリスを中心に多くの研究成果の積み重ねがある状況において、方法的な模索を経ずに、さまざまな新たな手法を導入することができた、ということもできる。そこで、本稿では、日本とドイツにおける歴史人口学あるいは人口史研究の成果——ここで取り上げることのできるのはそのほんの一部にしか過ぎないが——を、歴史研究におけるミクロとマクロとの関連に着目しながら、今後の研究課題あるいは研究方向について検討してみようと思う。

1. 国際比較における機能分析的手法

戦前の徳川社会のイメージは「停滞」という表現でもって表されるようなものであった。そのイメージへの積極的な挑戦は、1960年代の近代化論を経て、1970年代に数量経済史研究会を中心に、「史料から統計データを整備、それにもとづいた観察と仮説の構築・検証」による歴

史叙述の見直しという基本的な方針において進められた。⁽⁵⁾ その結果、従来の停滞史観には疑問が⁽⁶⁾付されるようになった。それは、「たえず西ヨーロッパ諸国との比較——しかし実際には西ヨーロッパからの『距離』——を念頭において日本を位置づけるという、発展段階論的な比較史アプローチ」⁽⁷⁾を根底から批判するものでもあり、そのことを通じて徳川社会の実像に迫ろうとするものでもあった。そこには、従来の日本における社会経済史研究がもっぱら構造分析に主力がそそがれ、機能分析的手法は無視されるか、せいぜい副次的な地位しか与えられていなかった⁽⁸⁾という鮮明な問題意識が存在した。この機能分析的手法を⁽⁹⁾発展させ、従来の比較史とは違ったアプローチを試みているのが、齋藤修の一連の研究である。そこで、速水の記念論文集に収められている齋藤の論文『都市蟻地獄説の再検討——西欧の場合と日本の事例——』をはじめに検討してみよう。その論文は「比較歴史民勢学⁽¹⁰⁾」⁽¹¹⁾とでも呼ぶべき領域の将来性を暗示している⁽¹¹⁾というが、どうであろうか。

齋藤論文の出発点は、速水の、近世の都市は「農村から人口を引き寄せては殺してしまう一種の蟻地獄⁽¹²⁾」という表現にある。そこでは、「農

注(3) 同著「近世農民の地理的移動と階層間移動」『日本の社会史』第六巻 岩波書店所収 196頁。

(4) 以下では、煩雑さを避けるために、「ドイツ」という表現で、特別な注釈をしない限り、ドイツ語文化圏を指すことにしたい。なお、イギリス、フランスなどの歴史人口学関係の文献は無数にあるが、ここでは参考までに邦語の紹介文献として、イギリスについては、齋藤修編著ピーター・ラスレット他著『家族と人口の歴史社会学、ケンブリッジグループの成果』リポート1988年、そして、フランスについては、二宮宏之他責任編集『家の歴史社会学』新評論1983年を挙げておく。また、経済史研究における歴史人口学的方法の有効性あるいは一般的概説については、速水融「人口史のアプローチ」『講座 西洋経済史V 経済史学の発達』同文館1979年所収を参照。

(5) 『論文集』6頁。

(6) 同頁。

(7) 同書10頁。

(8) 速水融『近世農村の歴史人口学的研究——信州諏訪地方の宗門改帳分析——』東洋経済新報社1973年まえがき。

(9) さしあたり、齋藤修『プロト工業化の時代 西欧と日本の比較史』日本評論社1985年、および、同『商店の世界・裏店の世界 江戸と大阪の比較都市史』リポート1987年を参照。

(10) Historical demography の訳語として、「歴史人口学」というよりも「歴史民勢学」とするほうがよい、と主張しているのは、速水である。『論文集』9頁およびその注12参照。

(11) 『論文集』10頁。

(12) 『論文集』所収齋藤論文240頁。

村から都市へ向かう人口の流れと、その人々を待ちかまえている都市における高い死亡率の異との関係が、この『蟻地獄』という一語のなかに巧みに表現されている⁽¹³⁾という。速水が明らかにしたのは、近世の濃州西条村農民の行動追跡調査における一つの帰結として、男子について奉公経験の無い者と都市奉公の経験の有る者との年齢階層別死亡率を調べたところ、30歳以上の者については、都市奉公経験者の方が死亡率が高かったという事実である⁽¹⁴⁾。速水の推察は、そこに都市奉公生活の影響を窺いしることができるというものであり、それは前近代社会の都市の持つ死亡率の高さを示すものであるとも言っている。この議論を起点として、「近代の人口転換以前の都市においては、(一)人口の自然増加率がほとんどマイナスであり、(二)その理由は高い死亡率水準に求められる⁽¹⁵⁾」という、ほぼ定説化しているとされる議論の再検討をしようとする。そこでは、都市の死亡パターンが検討の対象として選択され、さらに、西欧と日本の比較を試みる。しかし、「蟻地獄」のもう一つの構造的意味、つまり、農村から人口を引きよせる「都市」のもつ意味については問われない。都市と死亡率の相関に議論は集中されるが、果たしてそれが都市蟻地獄説の完全な再検討といえるかどうかである。それはともかく、斎藤の議論をもう少し追ってみよう。

最初に取り上げられるのは、人口密度と死亡率との統計的に有意な正の関係を明らかにしたファーの法則である⁽¹⁶⁾。都市の人口過密状態と死亡率との間に一定の関係があるというファーの法則は、産業革命期以降の英国の統計データをもとに割り出されたものであり、それを16世紀

から18世紀のイングランドにまでさかのぼって検討する。「都市」は、ここでは、人口過密、人口集積という表現で置き換えられる内容以外の何者でもない。その際、その時代について、都市ごとの平均余命のデータを得ることはほとんど困難なため、乳児死亡率を指標として採用している。その分析の結果、16～17世紀と18世紀とを比較すると「大都市、市場町、農村いずれにおいても乳児死亡率の上昇がみられる」ものの、「この一世紀余の間の死亡率悪化傾向は、明らかに大都市においてひどかった⁽¹⁷⁾」という結論が統計的に導きだされる。特に首都ロンドンへの人口集中の影響は顕著であるとしており、そこから最近の研究に基づき都市の疾病構造の分析を紹介している。そこで紹介されているマクニール説というのは、都市と農村における伝染性疾患による死亡率の差を、人口密度の点から明らかにしようとした⁽¹⁸⁾ものであり、「はしか、天然痘、風疹などのように、小児のかかるかなり死亡率の高かった（しかし、幸い治った場合には抗体ができるため以後は罹病することのない）伝染性疾患は、『ある臨界規模を越えた集住人口』の間においてのみ定着しえた⁽¹⁸⁾」という。そして、「高い人口密度と、他方で人間の体内における抗体発生メカニズムによって規定された、伝染性疾患の『貯水池』(endemic reservoirs of infections)としての役割こそ、伝統社会における都市のデモグラフィックがもっていたひとつの面だった⁽¹⁹⁾」というのが、マクニール説をさらに発展させたジョン・ランダースの結論である。ただし、このような研究は始まったばかりであり、また、老人ほど都市における死亡率が高くなることを説明できてはいない⁽¹⁹⁾し、先の速水の

注 (13) 同頁。

(14) 速水融「近世農民の行動追跡調査——濃州西条村の奉公人」速水融・宮本又郎他編『数量経済史論集 1 日本経済の発展』日本経済新聞社 1976年所収 91～92頁。

(15) 斎藤論文『論文集』240頁

(16) 同241～242頁。

(17) 同245～246頁。

(18) 同248頁。

(19) 同249～250頁。

都市奉公経験者の死亡率の高さの説明とは必ずしもかみあってはいない。ただ、ファーの法則が産業革命以前のイングランドにおいても妥当する、ということと、ここで紹介しなかったもうひとつのランダースの議論を参照しながら、人口密集が激しい都市の「高死亡率の理由として疫病の流行という事実をあげるのは妥当では」なく、「都市の死亡率は、水準としては高かったが、短期的変動という点では農村部と比べてむしろ安定的であった」。それゆえ、「なぜファーの法則が成り立つか」ということの根拠は、都市における死亡の年齢・死因別パターン、すなわち疾病構造の解明にまたねばならない」という結論を齋藤は導きだす。しかし、この議論において、本当に疾病構造だけが問題なのであろうか。だれが、なぜ都市に集まり、死んでいくのか。これは、都市の疾病構造からのみ分析されることではないであろう。死亡率を高める直接的な関連に議論を集中しすぎるのではないであろうか。

齋藤はその次に日本の事例を批判的に検討しようとする。しかし、なぜ日本の事例との比較が必要なのだろうか。日本の研究者だからであろうか。明確には示されていない。それはともかくとして、日本の研究では、都市蟻地獄説についてのエヴィデンスは西欧よりもさらに少ないようである。研究は本当に始まったばかりである。⁽²⁰⁾しかし、問題はまず、人口密度と死亡率との相関という議論に集中することでどれほどの発展的な結論が得られるかということである。それは都市蟻地獄説とはいいいながら、示していることは「高人口密度」蟻地獄説にすぎないからである。⁽²¹⁾確かにそのように問題を整理した形で、西欧と日本の比較をすると、その論点は非

常に明瞭である。しかし、比較することによる利点は何であろうか。ただ、ある法則が成立するか、しないかということのみが重要なのであろうか。農村から都市への人口流入が存在することがそのような議論のできる前提であり、都市と農村を人口密度の高低のみで区別していたのでは、本当の意味での「蟻地獄」は擱かないのではないであろうか。確かに機能分析的手法は、論点を明確化するのには役立つ。しかし、それは議論の出発点であり、議論の土台でしかないように思える。ただ堅固な土台を築くことは、その後の議論をより明確にすることは確かである。しかし、この蟻地獄に関しては、それぞれの地域の経済条件・気象条件・社会条件その他様々な要素がかかわってくる。⁽²²⁾上記のような機能分析は、結局、構造分析、例えば都市・農村関係の内的構造という旧来のテーマとリンクさせてこそ意味があるのではないか。また、西欧と日本の比較においては、史料の特性が各国で異なるための比較の難しさも考慮する必要がある。そこで以上の問題点を考慮した上で、次に、同じように死亡率を問題として統計データを駆使しながらも、少し違った角度から「家族の枠内における人間関係の分析をしている」⁽²³⁾というローレル・L・コーネルの論文「嫁・姑・姥捨山——19世紀日本農村における老人女性の差別死亡率——」を検討してみよう。

3. ミクロの構造分析的手法

コーネルが議論の出発点にするのは、例の『姥捨山』という民話である。「工業化に先立つ19世紀の日本において、このような老人殺しは本当にあったのであろうか」⁽²⁴⁾というのが、最

注 (20) 同250～256頁。

(21) 鬼頭宏『日本二千年の人口史』PHP 研究所 1983年、153頁参照。

(22) 『論文集』においても、スーザン・B・ハンレーの「前工業化期日本の都市における公衆衛生」というような社会史的研究が含まれている。

(23) 『論文集』9頁。

(24) コーネル論文『論文集』192頁。

初に発せられた疑問である。しかし、コーネルはその姥捨山の話について、事実そのものを検証しようというのではない。むしろ、姥捨山の話の検証を通じて、「伝統的日本社会における老人女性の役割を明確化できるのではないか」、つまり、姥捨山の話は問題の出発点でしかないが、その検証は結果として、「人口学における差別死亡率の問題に新しい視点を提供する」のではないか、⁽²⁵⁾としている。コーネル自身述べているように、この問題を検証する理想的方法は、第一に「老人殺しを動機づけるような考え方が当時の議論のなかに見出されるかどうか。第二には、もしそのような行為があったならば結果として生じるであろう人口学的パターンが見出されるかどうか。第三には、老人殺しを実際に行った者の残した証拠⁽²⁶⁾」というものを集めるべきであろう。しかし、それらすべてを満たすことは当然不可能であり、その論文では、信濃国横内村の宗門改帳を利用して得られる第二のタイプのデータを活用している。そこで検討されたのは、1751～75年に生まれ、60歳まで生きのびた同村の56人の女性である。この史料を利用することでライフコースや世帯構成が明確にされる。ただし、そこでは、今触れたように、「老人女性が実際に山に捨てられたかどうかという問題」を取り扱っているのではなく、「家族内である種の地位をしめる女性とそのほかの女性に比べて死亡率が高いかどうか」という点である、という。「老人殺し」というセンセーショナルな問題が、死亡率という人口学的指標に置き換えられて考察される。ここでもやはり機能分析的手法が明確に採用されていることがわかる。

まず、「もし姥捨山があったなら生ずると思われる人口学的パターンをモデル化する」とい

う作業からはじめられるが、得られるデータの内容に規定され、個人の健康状態や労働力としての家計への貢献度などは指標として導入できないために、家庭内の紛争、特に嫁と姑の争いと姥捨山とを関連づけるようなモデルを考えている。そこで、(1)嫁と同居する姑は、他の女性に比べて死亡率が高い。(2)嫁と姑の年齢差が小さいほど姑の死亡率が高い。(3)嫁に子供ができると死亡率は高まる、という三つの仮説を提示している。⁽²⁸⁾この仮説を検証するために、徳川社会の老人死亡率の一般的パターンをまず観察し、その後、それぞれの仮説について分析をしている。第一の仮説については、予想に反して、「嫁と同居する女性は他の女性に比べて、どの年齢においてもいく分生存率が高い」という結果が出た。⁽²⁹⁾次に嫁と姑との年齢差についてであるが、この仮説については、「年嵩の嫁は、同居する姑にたいして悪影響を及ぼすものであって、若い嫁を迎えることはそれなりに利益がある」という結論を導きだせるような強い統計的証拠を得ることができた。しかし、第三の孫についての仮説は、むしろ逆に孫を持つことで姑の生存率が高められるという発見がなされることになった。姥捨山⁽³⁰⁾は存在しなかったと結論づけられそうである、という。しかし、以上のことは「老人の間に差別死亡率がまったくなかったこと、つまり女性がどんな世帯に属そうが死亡率に差がなかったことを意味する」のではなく、むしろ「その世帯のあり方に深く関係」していたことが証明された、とする。そして慎重に次のように結論づけている。「では、なぜ、姥捨山の話は老人にかんする昔話としてこれほど有名なのだろうか。私の予想では、老人殺しは実際の行動としては存在しなかったとしても、

注(25) 同193～194頁。

(26) 同194頁。

(27) 人口学的手法については、同195頁参照。

(28) 同196～198頁。

(29) 同201頁。

(30) 同200～204頁。

心理的には確実に存在していたためであると思う。ここでとりあげたコーホートのうち、9割以上の老人女性は、どこかの時点で寡婦となった。そして、老人の平均余命が高かったこと、また夫婦の年齢差がかなり大きいことから考えて、寡婦の暮らしはかなり長かった。若干(10パーセント)の老人女性は夫の死後すぐに、すなわち2～4年以内に死亡した。しかし半数以上は10年以上、また約5人に1人は20年以上寡婦として生きのびた。民族学者が嫁と姑の間の対立にかんして述べていることを思えば、中年の夫婦が姑を山に捨てに行けたらと願うこともきつと多かったに違いない⁽³¹⁾と。

数量的なマイクロ分析でありながらも、メンタリティを論ずることに成功している。つまり、一農村の56の老人女性の分析という非常にマイクロなレベルの検討でありながら、個別の事例分析には終わっていない。それは、家族を媒介に歴史人口学と社会史とを結びつけようとする試みが成功しているからであろう。というも、死亡率あるいは生存率という人口学的指標と世帯構造との関連が、仮説の設定において明確に打ち出されているからである。さらに、言い換えれば機能分析的というよりも、結果として構造分析的な考察を踏まえた統計学的手法が採用されているからである。ただし、それが可能となっているのは、まずは、ヨーロッパの教会記録簿と比較して、宗門改帳がもつ史料的優位さの故に、それが家族史的社会史研究への恰好の資料提供者であるということに基づくものであり、次には、構造分析といってもそれが世帯構造という元来マイクロな構造との有機的結合を問題にしているからである。たとえ方法的に同様

のものを志向したとしても、先に述べた斎藤論文で取り扱われたよりマクロなレベル(例えば都市化⁽³⁴⁾)と人口学的指標との相関を見出そうとする場合には、問題は当然もっとも複雑になってしまう。それ故、機能分析的手法をさらに押し進め、問題を簡略化させる必要性が出てくる。しかし、それが次に取り上げるようにさらにマクロな次元を問題にする鬼頭論文においては、本来の「歴史民勢学」の意図は、その焦点を合わせるのが非常に難しくなるようである。

4. ミクロ・デモグラフィーとマクロの社会構造

4-1 「歴史民勢学」と文明システム

「近世日本の主食体系と人口変化」と題する鬼頭論文は、日本列島における文明システムの変遷を歴史人口学の目をとおして見ようとする。そこでは、マクロ空間についての長期時系列分析が基盤になっている。彼によると、「過去一万年の間に、日本列島の人口は少なくとも四回の大きな成長とそれに続く停滞を繰り返しながら、循環的に成長してきた」という。そしてその人口増加の長期的波動は日本列島における文明システムの転換と密接に関連しており、それは、「縄文サイクル」、「水稻農耕化サイクル」、「経済社会化サイクル」そして「工業化サイクル」に区分されるという⁽³⁵⁾。さらに、この文明システムの転換が、日本人の主食の変遷に対応するという鬼頭の提唱を受けて、小山修三と五島淑子は栄養学的見地から、第一の波：堅果類の段階、第二の波：米に収斂した段階、第三の波：雑穀への拡大が行われた段階、そして第四の

注(31) 同207～208頁。

(32) 二宮宏之「歴史のなかの『家』」同他責任編集『家の歴史社会学』新評論1983年所収、14頁および32頁。

(33) ローレル・L・コーネル/速水融「宗門改帳——日本の人口記録」『論文集』所収101～126頁参照。

(34) 以下で述べるようにその概念は、「都会化」(Urbanisierung)というより広いパースペクティブにおいて把握されるべき重要な内容を含んでいると考える。

(35) 鬼頭論文『論文集』35頁。

波：サツマイモが加わり、さらに現代の多様化⁽³⁶⁾へ向かう段階という四つの文明システムとの対応を明らかにした。鬼頭論文が取り扱っているのは、その中での第三の波についてである。それについて、彼自身は、「日常生活の構造と人口の長期波動との関係について検討するための初歩的な試みとして、江戸時代における主食体系の成立とその特質をめぐらる問題をとりあげ、歴史人口学の立場から考察を加える⁽³⁷⁾」と表現している。この節では、その論文において、彼が「歴史人口学の立場」をどのように理解し、そしてそれが論文の内容においてどのように反映しているかを見てみよう。

彼の論点は、一つに要約される。つまり、「文明システムを構成するさまざまな要素のなかでも、食は人口扶養にとって基本的なものであるから、食事文化の変遷と人口成長の波とは密接に関連する⁽³⁸⁾」という理解事項である。しかし、その両者の関連は決して簡単なものではない。主食体系の歴史を分析対象に置きながら、具体的には、江戸時代の米食率、白米食の普及の実体、そして、「江戸時代における白米食の普及と主食内容の多様性ないし雑食性」についての「主食体系の変遷」の中での位置づけが、『長期経済統計』『農業統計表』や『諸国産物帳』⁽³⁹⁾などの統計資料を中心に検討される。つまり、分析されているのは、主食体系の変遷そのものである。そこで確認されたことは、「主食物の内容は地域により多様である、という前工業化社会に共通する一般的傾向」を認めることができ、「移行期の19世紀後半においても、主食体系は米を中心にしながらも、自然的条件にかなり強く条件づけられた、明瞭な地域性をもっていた⁽⁴⁰⁾」という点である。さらに、日本の伝統的な

主食体系の成立についての仮説⁽⁴¹⁾を提示した後に、人口増加の地域偏差と主食体系との関連について、人口・水田面積比の推移を地域ごとに比較することによって、米食率、言い換えれば米以外の主食物への依存度と人口増加との関連を指摘している。そこで問題になるのは、成長する人口を支えるのは、米生産の増大か、それとも甘藷の導入⁽⁴²⁾などがそれを支えていたのか、という点である。彼は、「米が主食物のなかで中心的な地位をしめるようになってからは、人口成長期は米の生産が増大した時代であり、停滞期は米以外の主作物生産の伸びが目だった時代だと言えないだろうか」として、なぜか、その論文での実際の分析対象以前の時代についての仮説を提示し、「このことは近世についてもあてはまる——人口と水田面積の十七世紀における拡大、十八世紀における停滞、そして十九世紀における成長の始動」という対応関係を指摘している。しかし、彼自身述べているように、「米の一人当たり摂取量と米食率については、もっぱら白米を食べる都市人口の規模、非米食地域の人口変化などによっても影響を受けるから簡単にいうことはできない」。実際、都市も農村もすべて含めて、人口・水田面積比を求め、主食体系の変遷との関連でマクロの全国レベルで比較することの積極的な意味はどこにあるのだろうか。超地域的な主食体系の存在の歴史人口学的意味は何なのか。しかし、この点については突っ込んだ議論はなされず、再び、主食体系そのものについての議論にもどき、「全体として米の摂取量を増やしつつ、野生動植物への依存度を低下させ、麦・甘藷の利用度を高めて主食作物の種類と食べ方を多様化させたのが、近世の主食体系であった。そしてこのようなパ

注 (36) 同36頁。

(37) 同35頁。

(38) 同36頁。

(39) 同36～38頁。

(40) 同42頁。

(41) 同50頁。

(42) 同51～54頁。

ターンは十八世紀初期には原形を表していたといえる」と結論づけている。⁽⁴³⁾

「過去に生きた庶民の日常生活の記録」を「歴史民勢学」と捉える鬼頭は、その視点が『文明システム』(文明系)の成り立ちと働きに関する研究を本分とする「文明学」に通じるものであるとして、人口を「文明転換をうながす重要な内生的要因」として見ている。しかし、そこで示される食文化の転換と人口との関連は本当に内生的なものとして観察されているのだろうか。それは、厳密な意味での歴史人口学の立場ということができるのであろうか。人口成長と主食体系との関係は、さらに複雑な有機的
社会関係を含んでいると思うがどうであろう。そこでは人口現象はかなり表面的にしか捉えられてはいないように思える。つまり、ある地域全体のマクロな人口増加あるいは減少が、米の主食率の一つの指標として取り扱われているに過ぎない。通常「ミクロの社会史」あるいは「高倍率の顕微鏡ともいべき能力を備えた分析方法」⁽⁴⁵⁾としてみることでできる歴史人口学とはかなり趣を異にしている。それに、人口現象を、他の歴史分野との関連において捉える場合、その有機的な関係、⁽⁴⁶⁾言い換えれば内部メカニズム、例えば地域レベルでの具体的な米の消費および流通形態との関連がもっと明確にされるべきではないであろうか。その意味で、ミクロ・デモグラフィーと社会あるいは文明システム、言い換えれば、マクロの社会構造との関連について

は、さらに厳密な方法的検討が必要に思われる。ミクロの社会史としての歴史デモグラフィーと、ミクロ・デモグラフィーと社会構造との関連に着目した歴史デモグラフィーとが、ドイツ語文化圏では、歴史人口学(Historische Demographie)と人口史(Bevölkerungsgeschichte)として区別されている。それは、通常 population history と historical demography として区分されている内容と必ずしも一致しないが、ドイツの歴史学的伝統におけるその区別を確認することは、上記についての方法的検討をする上で、重要な糸口を与えてくれそうである。

4-2 人口史(Bevölkerungsgeschichte)と歴史人口学(Historische Demographie)

人口史研究は、歴史人口学的研究よりはるか
に古い伝統を有している。ドイツにおいては、1907年に O. K. Roller によって18世紀における都市 Durlach の住民についての研究が公にされた時、すでに人口史研究はひとつの頂点に達していたようである、といわれる。⁽⁴⁷⁾しかし、第二次大戦後、1970年代に入るまでの間は、ドイツにおいては、Wolfgang Köllmann や Karlheinz Blaschke ⁽⁴⁸⁾の研究を除くと、しばらくは、その分野での研究成果は少なかった。しかし、最近
は再び多様な人口史あるいは歴史人口学的研究が発表されている。⁽⁴⁹⁾

人口史的研究と歴史人口学的研究には、方法および対象について重要な相違がある。まず使

注(43) 同54頁。

(44) 同34頁。

(45) 速水融「コメント、江戸時代の歴史民勢学から」『家の歴史社会学』(前掲書)所収、279頁。

(46) 速水融「近世農村の歴史人口学的研究」10頁あるいは、同「近世日本経済史における人口」4頁参照。

(47) W. R. Lee, Zur Bevölkerungsgeschichte Bayerns 1750-1850: Britische Forschungsergebnisse, in: VSWG 62 (1975), S. 309-338, ここでは S. 310, および, A. E. Imhof, Einführung in die Historische Demographie, München 1977, S. 20.

(48) さしあたり, K. Blaschke, Bevölkerungsgeschichte von Sachsen bis zur industriellen Revolution, Weimar 1967, W. Köllmann, Bevölkerung in der industriellen Revolution, Göttingen 1974 を参照。後者には、1950年代から1970年代初頭にかけて Köllmann によって発表された諸論文が収録されている。また、邦訳文献としては、W. Abel『農業恐慌と景気循環——中世中期以来の中欧農業及び人口扶養経済の歴史』(寺尾誠訳、未来社1972年)を挙げておく。

用する史料であるが、人口史研究は、人口調査を目的に行われた近代のセンサスを使用するのに対して、ヨーロッパにおける歴史人口学は、洗礼・婚姻・埋葬についての記録である教会記録簿が使用される。前者では、その結果、19・20世紀が時期的な研究対象になるのに対して、後者においては、それより遙かに古い時代、つまり17世紀あるいは16世紀にまで遡って研究を進めることができる。教会記録簿の分析に際して使用される歴史人口学独特の方法は家族復元法⁽⁵⁰⁾と呼ばれる。この方法が開発され、さらに体系的に研究が進められるようになるのは、1960年代に入ってからフランスそしてイギリスにおいてである。そしてそこに日本も追加することができるであろう。それに対して、ドイツの研究者がこの方法を導入するようになるのは1970年代といえることができるが、この方法は、ドイツにおいては、実はすでにナチ期にユダヤ

人迫害との関連において、系譜学的方法として行われていた。1930年代そして40年代にはその成果として数十におよぶ村落種族簿⁽⁵²⁾ (Dorf-あるいは Ortssippenbücher) が公刊された。そこでは、教会記録簿の原本をもとにそれぞれの村落に住む住民の家族構成が復元されている。非常に多くの時間と労力を必要とする家族復元法であるが、ドイツではこのような人種イデオロギーに基づいた研究成果を利用することで、皮肉にも作業上の省力化が可能となっている⁽⁵³⁾。しかし、それにもかかわらず具体的な研究成果を発表するには、それ以前に多くの時間と労力を必要とするために、大部分の場合、個別の村落あるいは限られた地域に研究の中心が限定されることになるか、それとも、ミクロ・デモグラフィの分析を基にマクロの社会史あるいはメンタリティ史の分析に向かう傾向がある⁽⁵⁴⁾。また史料の残存状況によるために、自由に研究対象を

注 (49) さしあたり最近のものとして、歴史人口学の分野では、Arthur E. Imhof, *Die Lebenszeit. Vom aufgeschobenen Tod und von der Kunst des Lebens*, München 1988, 人口史の分野では、Reinhard Schüren, *Soziale Mobilität. Muster, Veränderungen und Bedingungen im 19. und 20. Jahrhundert*, St. Katharinen 1989 を挙げておく。その他の文献については、本文あるいは注において随時言及する。

(50) この方法についてはすでに日本でも多くの解説がなされている。速水融「人口史的アプローチ」を参照のこと。また、日本経済史あるいは社会史研究へのそのような手法の導入に基づく研究成果の平易な解説として、同『江戸の農民生活史、宗門改帳にみる濃尾の一農村』NHKブックス555, 1988年を参照。

(51) 最初の成果は、A. E. Imhof (Hrsg.), *Historische Demographie als Sozialgeschichte. Gießen und Umgebung vom 17. zum 19. Jahrhundert*, 2 Teile, Darmstadt u. Marburg 1975 である。

(52) 当初は30,000冊の公刊が計画されていたようである。A. E. Imhof, *Einführung*, S. 12-35, ここでは、S. 27.

(53) この種族簿を利用して、14の村落について、モデルとなるようなミクロ・デモグラフィの総合的研究として、J. Knodel, *Demographic behavior in the past. A study of fourteen German village populations in the eighteenth and nineteenth centuries*, Cambridge (New York etc.) 1988 が挙げられる。しかし、それに対しては、種族簿の史料批判の不十分さ、あるいは、ドイツ語圏の研究者の成果が充分取り入れられていないという、J. Schlumbohm, *Möglichkeiten und Grenzen historischer Demographie. Zu John Knodels neuem Buch*, in: ZHF 16 (1989), S. 49-53 における指摘がある。しかし、今後ドイツのミクロ・デモグラフィについて、必見のモノグラフであることは確かである。そのように活用されている種族簿ではあるが、もちろんすべての村落あるいは都市においてそのような種族簿が残されているわけではない。この資料的意義については、J. Knodel, *Ortssippenbücher als Quelle für die historische Demographie*, in: GG 1 (1975), S. 288-324. また後に紹介するドイツ人の手になる研究の多くもこの種族簿と教会記録簿を併用して、利用している。

(54) たとえば A. E. Imhof の一連の研究: *Die gewonnenen Jahre*, München 1981; *Die verlorenen Welten*, München 1985; *Die Lebenszeit*, München 1988 が挙げられるが、彼の著作は日本語でも紹介される必要があるであろう。

選べるというわけではない。ただ、個別の地域史研究を活動の場とするそれらにおいて、基本的には、ミクロの社会史的研究にその重点が置かれる。

それに対して人口史においては、歴史人口学よりも比較的広い地域を取り扱うことが多くなるもの⁽⁵⁵⁾、Köllmannの都市バルメンについて⁽⁵⁶⁾の研究に見られるように、人口史と歴史人口学との根本的な相違は、単なる地理的空間の大小にあるのではない。むしろ、人口史の場合には、生活空間と人口との絡み合いがより明確に問題に⁽⁵⁷⁾されている。それ故、住民移動と社会層あるいは工業化と人口動態との関係などが主題として取り上げられることになる。それに対して、歴史人口学の場合には、むしろ人間関係あるいは日常生活におけるミクロのレベルが対象になることが多い。つまり、性の歴史、家族史⁽⁵⁸⁾あるいは集合的メンタリティの歴史などである。ただ、歴史人口学が世帯規模や結婚年齢あるいは日常生活についてわれわれが信じていた多くの

⁽⁵⁹⁾神話を打破してきた現状を踏まえ、さらに次にみるようなドイツにおける最近の研究成果を見てみると、今後は、そのような区分に固執する必要はないし、むしろ両者の研究成果を積極的に活用し、⁽⁶⁰⁾関連する領域を開拓していくことが必要だと考える。

4-3 地域社会構造史とミクロ・デモグラフィ

1984年・85年の両年に、西ドイツでは、個別の論文ではなく、モノグラフ（博士論文あるいは教授昇格論文の類）⁽⁶¹⁾が立て続けに⁽⁶²⁾刊行された。イギリスあるいはフランスでのこれまでの研究成果を踏まえたそれらの研究は、ドイツの有する史料のおよび歴史的⁽⁶²⁾背景の独自性を生かした研究⁽⁶³⁾といえる。また社会層分析とミクロ・デモグラフィあるいは信条の社会史とミクロ・デモグラフィとの関連という、人口史と歴史人口学との境界線⁽⁶³⁾に位置する研究としてもみることができる。そして、それらの研究か

注 (55) A. E. Imhof, Bevölkerungsgeschichte und Historische Demographie, in: R. Rürup (Hrsg.), Historische Sozialwissenschaft, Göttingen 1977, S. 16-58 ここでは S. 16。また、典型的なマクロの人口史研究の概説として、P. Marschalck, Bevölkerungsgeschichte Deutschlands im 19. und 20. Jahrhundert, Frankfurt a. M. 1984 を挙げておく。

(56) W. Köllmann, Sozialgeschichte der Stadt Barmen im 19. Jahrhundert, Tübingen 1960.

(57) Ebd., Bevölkerungsgeschichte (a. a. O.), S. 19ff..

(58) A. E. Imhof, Historische Demographie, in: W. Schieder/V. Sellin (Hrsg.), Sozialgeschichte in Deutschland, Bd. II, Göttingen 1986, S. 32-63, ここでは S. 36ff.。また Volkskunde との関連において、アーサー・E・イムホフ「歴史デモグラフィと民俗学との対話」『成城文藝』118 (1987) 66 ~98頁をあわせて参照のこと。

(59) Vgl. M. W. Flinn, The European Demographic System 1500-1820, Brighton 1981.

(60) A. E. Imhof, Bevölkerungsgeschichte und Historische Demographie (a. a. O.), S. 18.

(61) R. Gehrman, Leezen 1720-1870. Ein historisch-demographischer Beitrag zur Sozialgeschichte des ländlichen Schleswig-Holstein, Neumünster 1984; T. Kohl, Familie und soziale Schichtung. Zur historischen Demographie Triers 1730-1860, Stuttgart 1985; W. Norden, Eine Bevölkerung in der Krise. Historisch-demographische Untersuchungen zur Biographie einer norddeutschen Küstenregion (Butjadingen 1600-1850), Hildesheim 1984; W. G. Rödel, Mainz und seine Bevölkerung im 17. und 18. Jahrhundert. Demographische Entwicklung, Lebensverhältnisse und soziale Strukturen in einer geistlichen Residenzstadt, Wiesbaden 1985; P. Zschunke, Konfession und Alltag in Oppenheim. Beiträge zur Geschichte von Bevölkerung und Gesellschaft einer gemischt-konfessionellen Kleinstadt in der Frühen Neuzeit, Wiesbaden 1984.

(62) A. E. Imhof, Historische Demographie (a. a. O.), S. 46.

ら容易に理解されることは、歴史人口学は基本的に地域史を基盤にしているということである⁽⁶⁴⁾。つまり、歴史人口学は、本当に小さな空間の研究、つまり個々の都市や農村についての研究であるにもかかわらず、予想以上に一般的な問題への解答を与えてくれることにその本来の意義がある、と思う⁽⁶⁵⁾。そのことは先に見たコーネル論文においても見ることができた。その場合、個別の事例研究の成果は、ただ個別のデータに止まっているものではない、ということである。例えば、一村単位のそのような研究を通じて、都市・農村間での住民移動に関して、さらに一般的に議論を展開しようとするような未知のメカニズムを示唆してくれる場合がある⁽⁶⁶⁾。そして、その結果、社会変動やマクロの人口現象の新たな解釈を可能にしてくれる。それは、ひとつに統計的に数量データの相関が明確にされることが多いからであり、さまざまな「要因相互間の関連様式がはっきり示され」るようなモデルが提示されているからである⁽⁶⁷⁾。

そのようなメカニズムが明確に記述されたモデルを提供し、その結果、大きな国際的反響を

呼んだものにプロト工業化論があった⁽⁶⁸⁾。かつて二宮宏之は、プロト工業化論の提起している問題を、1. 手工業生産の農村への展開、2. 農村工業の実態、3. 人口学的特徴、そして4. 地域経済における農業と工業の統合の視点、という四つの問題に整理したことがあった⁽⁶⁹⁾。このように整理されたプロト工業化論における実際の研究の場は、地域史的なものであり、この議論においてとりわけ特徴的であったのは、人口現象と手工業生産の広がり、あるいは、後退との相関を問題にしている点であり、日本の場合、封建制社会から資本制社会への移行問題に関して、大塚史学で知られているように、従来から、農村工業に関心の持たれていた研究環境においても、その議論は目新しい内容を有していた。

ドイツにおいても、ドイツ歴史学派の伝統において、Werner Sombart や Karl Bücher によって、初期の資本主義の展開における手工業地帯 (Gewerblandschaft) の持つ意義が充分認識されていたし、それは、「工業の田園化」⁽⁷¹⁾ (Rustikalisierung der Industrie) という表現で表されていた。しかし、その議論は、メンデル

注 (63) 比較的标准な研究としては、Gehrmann, Rödel の研究があげられるが、それらも一農村の研究ではなく、それぞれ数個の教会教区そして都市を対象に通常歴史人口学で行われる分析が国際比較の可能な形で行われている。それに対して、Kohl のものは、特に人口史的伝統を意識し、社会層の分析における歴史人口学の可能性を探っている。また、Zschunke は小都市を取り扱っているものの、キリスト教信条のデモグラフィーへの影響が中心に置かれている。そして、最後に Norden の研究は、北ドイツ独特の気候風土を考慮した、マイクロ・デモグラフィーの地域社会史研究である。上記文献については、注 (61) を参照のこと。

(64) E. Hinrichs, Regionale Sozialgeschichte als Methode der modernen Geschichtswissenschaft, in: Ders./W. Norden, Regionalgeschichte. Probleme und Beispiele, Heidelberg 1980, S. 1-20, ここでは S. 11f.。

(65) 速水融『江戸の農民生活史』参照。

(66) 同194頁以下参照。

(67) 斎藤修「日本のプロト工業化」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』(社会経済史学会創立50周年記念) 有斐閣 1984年所収36頁。

(68) プロト工業化論については、さしあたり、斎藤修『プロト工業化の時代 西欧と日本の比較史』日本評論社 1985年参照。

(69) 二宮宏之「西欧のプロト工業化」社会経済史学会編『社会経済史の課題と展望』(社会経済史学会創立50周年記念) 有斐閣 1984年所収24~33頁参照。

(70) 斎藤修「日本におけるプロト工業化」35頁。

(71) W. Mager, Protoindustrialisierung und Protoindustrie. Vom Nutzen und Nachteil zweier Konzepte, in: GG 14 (1988), S. 275-303, ここでは S. 279-284.。

スによって喚起されたプロト工業化論のインパクトにより、ネオ・マルクス主義的な、ある意味では不毛なほどの理論的考察の一時期を経て、次第に個別研究がなされるようになり、より建設的具体的な成果が現れつつある。その結果、発展段階論的なプロト工業化モデルは背後に退き、かろうじて「プロト工業」という概念のみが研究史上生き残りそうである。そして、先のゾンバルト流の「工業の田園化」の議論を飛躍的に発展させたのは、手工業史・農業史・住民史および人口史・社会史・メンタリティ史などが地域史の枠組みのなかで、相互の絡み合いを強調することによる総合把握への道を示唆していることにある。それは、諸プロト工業の発展によって、地域全体に消費社会が形成され、そのことにより、より内密的な産業・消費地域社会が形成される(die Ausbildung gewerblich verlichteter Regionen)ようになるからである、と W. Mager はいう。この指摘についての経験的知識の蓄積はまだ希薄ではあるが、それは

日本ではすでに、寺尾誠によって、理論的考察および歴史研究のもとに指摘されていたことであつた。

西ドイツにおいて、プロト工業化論に関する研究をみずから行い、また諸研究の成果を整理した W. Mager ではあるが、例えば、斎藤によって明確化され、そして元来のプロト工業化論において特徴的であつた、人口史あるいは経済人口学的考察は、ほとんど欠落している。ただ、Mager の指摘で重要な点は、プロト工業論を、工場制への移行との関連よりも、近世社会の「都会化」(Urbanisierung)との関連において捉えていることにある。そこでは婚姻パターンとの関係も指摘されているが、具体的な研究が進められているようには思えない。いずれにせよ、「プロト工業論」(プロト工業化論ではない)は、単に経済あるいは社会構造の問題領域、あるいは経済人口学的領域だけに限定せず、地域社会全体の「都会化」との関連において、さらに厳密にミクロ・デモグラフィーの

注 (72) 高木正道『ヨーロッパ初期近代の諸相——経済史と心性史のあいだ——』梓出版社 1989 年において、ハンス・メディックの議論がそのまま紹介されているが、具体的実際の研究との関連についてはなんら示唆を得ることはできない。

(73) P. Kriedte/H. Medick/J. Schlumbohm, Die Industrialisierung vor der Industrialisierung, Göttingen 1977, u. C. Zimmermann, Dorf und Land in der Sozialgeschichte, in: W. Schieder/V. Sellin (Hrsg.), Sozialgeschichte in Deutschland, Bd. II, Göttingen 1986, S. 90-112, ここでは S. 98ff. 参照。また、日本の研究者においても、後の工業化期について、ドイツ特有の地帯構造(「経済圏」)に着目したものとして、渡辺尚『ラインの産業革命——原経済圏の形成過程——』東洋経済新報社 1987 年を参照。なお、この著作については、筆者の書評(『三田学会雑誌』81-4(1989) 所収)を併せて参照のこと。

(74) W. v. Stromer, Gewerbeviere und Protoindustrie in Spätmittelalter und Frühneuzeit, in: H. Pohl (Hrsg.), Gewerbe- und Industrielandschaften vom Spätmittelalter bis ins 20. Jahrhundert, Stuttgart 1986 (=VSWG Beiheft 78), S. 39-111, W. Mager, Protoindustrialisierung und Protindustrie (a. a. O.), S. 282f. 参照。

(75) W. Mager, ebd., S. 281f.

(76) Ebd., S. 303.

(77) 大塚久雄の局地的市場圏に関する議論を参照。また、それに対する批判、そしてさらに議論を発展させたものとして、寺尾誠『『局地的市場』仮説的方法的検討』『三田学会雑誌』66 (1973), および、同『中世経済史』第五講「農村市場の経済構造——都市と農村の対抗——」, 特に 101 頁参照。

(78) 斎藤修『プロト工業化の時代』特に 73-116 頁参照。

(79) 上記より、都市化 = Verstädterung と都会化 = Urbanisierung とは区別されるべきであろうことが理解されるであろう。

(80) W. Mager, a. a. O., S. 302.

議論と関連づけながら、地域の経済社会化あるいは地域社会の多様化あるいは単一化の過程の吟味という枠組みにおいて、今後は地域社会構造史について、部分的な解明を目的とする個別論文ではなく、総合的かつインテンシヴな研究がなされていくべきであろう。そのためには、「国際関係」あるいは「国家の政策」についても視野におさめながら、「都市・農村関係」、コミュニケーション・交通網等あるいは人々の職業習得および社会化とも関連する「社会的および人的ネットワーク」さらにはその背後にある一般的な「自然条件」をも考慮にいれながら相互の絡み合い、特に、特定の時空間に特徴的な絡み合いの構造⁽⁸²⁾に着目する必要がある。それは構造的、機能的、心性的分析の地域史的総合ということもできようが、非常に困難な課題⁽⁸³⁾であることは確かである。

5. おわりに

機能分析的手法に基づく数量経済史研究グループが、戦前の社会経済史家のもっていた徳川社会のイメージを、「問題提起、観察、仮説設定⁽⁸⁴⁾、検証」の過程を通じて得た確かなデータで

もって、大きく転換させていった功績は、いくら評価してもしつこくせないものがある。また、歴史人口学あるいは人口史研究がそこで果たした役割は多大である。そのような研究史的状況を踏まえた上で、さらに徳川社会の実像にせまろうとする試みが今後も続けられると考えられるが、その方向が、「歴史民勢学」という表現で集約されるように、「伝統社会をそのものとして捉えるという方向」であるとした場合⁽⁸⁶⁾、あくまでも、機能分析的あるいは数量経済史的手法のみに固執する必要があるであろうか。そのような研究の先導者である速水自身、通常の彼の研究とは一風変わった「徳川日本成立の世界史——フェリペ二世と豊臣秀吉⁽⁸⁷⁾」という論文における結論部分において、「内部的連関の解明は、社会科学の方法を適応することで相当程度可能であろう。しかし、それぞれが独立して進行していた人間の集団の接触〔ポルトガルと日本——筆者〕が、それぞれの展開の、どの時点で実現し、いかに反応したか、ということ、社会科学的方法で説明できるだろうか」と述べ、「歴史が社会科学と異なる点は、実はそこにあるのではなかろうか⁽⁸⁸⁾」という。しかし、数量経済史的方法が市民権を獲得するための努力は実際

注(81) それは確認された既知の人口史的データを大いに活用・利用して、関連領域の分析に役立てようということである。そこでは、人口史的データの収集そのものが課題とはならず、例えば、既知の婚姻パターンなどを、「都会化」の一つの指標として利用することができるであろうし、T. Kohl のように、その成否はともかくとして、社会層分析に関連づけることも可能であろう。

(82) 「絡み合いの関係構造」については、寺尾誠『社会科学概論』慶應通信1989年、特に239頁参照。また、その議論と関連するものとして、筆者の論文「ミュンヒにおける相互浸透論の批判的検討——歴史研究と社会学理論」『寺尾誠教授還暦記念論文集』（1990年9月慶應通信より発行、所収予定）もあわせて参照のこと。そして、そのような地域社会構造史的研究の一つとして筆者は現在、19世紀中葉における、ニーダーライン地方におけるカトリックやプロテスタントの職人組合の、人的ネットワークとしての社会的経済的意義についての分析を検討中である。

(83) ただ、部分的にはすでに多くの研究の蓄積があり、例えば、社会が大きく変化する際の人的ネットワークの果たした役割を考察する場合、さまざまな社会層に属する住民の婚姻圏の変化、結婚年齢の変化あるいは差別死亡率などを関連づけて研究することができるであろう。

(84) 『論文集』355頁。特にそのような明示的な方法を「実証精神」と表現している。同書9頁。

(85) その成果は、さしあたり速水融・宮本又郎編『経済社会の成立—17-18世紀』（日本経済史1）岩波書店1988年に結実している。

(86) 『論文集』9頁。

(87) この論文も『論文集』（265～297頁）に収録されている。

(88) 同294頁。

並大抵のものではなかったであろうし、国際舞台において日本の歴史人口学的研究が十分に評価を受けている現状においても、未だに日本の読者層には、繰り返し同じような解説をせざるを得ない現状をどう理解すれば良いのだろうか。

ドイツ語文化圏では、日本よりも比較的遅く、歴史人口学的手法あるいはその問題設定が紹介されたにもかかわらず、逆に実に様々な学問分野がそれを消化吸収するだけの基盤を備えていたようである。それは、歴史人口学の方法が一般に紹介される以前において、すでに人口史的分析において様々な問題が提起されていたと同時に、従来の政治史への訣別という新たな「社会史」あるいは「歴史的社会科学」の模索の過程において、それぞれの学問分野、例えば「経済史」「教会史・信条史」「領邦史・地方史」(Landesgeschichte)「都市史」あるいは系譜学・家系史などにおいて、豊富な蓄積と新たな問題設定の基に研究が続けられていたこと、そして何よりもまず資料収集にあたって不可欠な文書館等の充実が、新しい学問的手法の早急かつ確実な普及に好条件を提供することになった。特に、様々になされていた地域史研究の成果はすぐさま利用できるものであったし、他の既存の学問分野との応答も容易であったといえそうである。特に信条史との関係でウェーバー・テーゼについても言及している P. Zschunke の小都市についてのマイクロ・デモグラフィック研究や、

地域史的・社会史的モデルとも思われる気象条件とマイクロ・デモグラフィックとの関連について分析した W. Norden の研究などは良い例である。それは、政治的・信条的、経済空間的あるいは自然的・文化的に実に多様な歴史的ドイツが、歴史人口学的あるいは人口史的研究にとって一種の「実験室」のようであり、自ずと様々な独自の分析可能性を提供してくれるからであろう。ドイツでは、予想より早くに個別地域史的ではありながらも、日本以上に多様な研究成果が発表されているように思えるが、どうであろう。

以上のことを考慮した時、国際比較の問題においても、「共通項」を考える、つまり、例えば同一のモデルについての検証という形態をいたずらに取る必然性は、必ずしもないのではないであろうか。日本の歴史研究者の独自性あるいは日本の史的・社会構造的背景の独自性を、歴史社会科学研究に生かした上で、同一のテーマでもって国際的な応答が可能ではないであろうか。一つには、人類一般に共通するマイクロの構造的テーマ、つまり家族関係、若者、子供、未婚の母などという人類学的な社会史的課題設定を行うことが可能であるだろうし、それは実際盛んに行われている。ただ、例えば「都市化」あるいは「都会化」の問題などにおいて、あるいは経済史という学問領域においては、現状では比較史的方法は、不十分な発展段階論的発想を除くと、斎藤に見られるような経済人口

注 (89) 筆者は、1985年に留学先の西ドイツの Stuttgart における国際歴史家大会で、速水氏に再会した際、そのことを実体験することができた。なお、歴史人口学についての啓蒙的な紹介を、速水氏は繰り返し行っている。

(90) 速水融「日本における人口史研究の現況と問題点」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』(社会経済史学会創立40周年記念)有斐閣 1976年、231～239頁において、速水は、当時の日本の人口史研究の問題点の一つとして、「資料収集にあたっての情報の組織化」の必要性を挙げていた(同236頁)。

(91) P. Zschunke, a. a. O., 注 (61) (63) 参照。

(92) W. Norden, a. a. O., 注 (61) (63) 参照。

(93) A. E. Imhof, Historische Demographie, S. 46 において、フランスやイギリスの個別研究をすべてそのまま踏襲する必要がなく、むしろ歴史的ドイツの特性を生かすべきだ、と Imhof は言う。その論文で彼は、特に医学史との学際的共同研究の必要性を強調していた。

(94) 例えば、M. Mitterauer, Ledige Mütter. Zur Geschichte unehelicher Geburten in Europa, München 1983 などが挙げられよう。

学的方法が唯一国際的相互理解を可能にする道なのであろうか。しかし、例えば、徳川社会像を全体としてヨーロッパ人に伝えようとした時、そのような方法のみが最善であろうか。それが、国際的な学問的討論の共通の基盤を提供するという点での意義はいくら強調してもしすぎることはないであろう。実際、彼によって整理されたプロト工業化論は、さらに国際比較を可能にするような様々な問題提起を可能にしている。しかし、筆者が強調したいのは、このような社会史的あるいは数量的経済史的手法に加えて、個性的伝統的な地域社会を同一の指標に還元して比較するだけではなく、民衆の生きる場としての地域社会を、そのものとして把握していく必要があるのではないか、ということである。それが、ドイツ語文化圏における歴史人口学あるいは人口史的モノグラフあるいは諸プロト工業についての研究と日本のそれとの比較——も

ちろん本稿でそのほんの一部が取り上げられたにすぎないが——をした時の筆者の印象である。⁽⁹⁵⁾ただ、フランスの歴史家が、地域主義的運動にほとんど関心を示さないように、そのような地域社会構造史の提唱も特殊ドイツ的な発想なのであろうか。⁽⁹⁶⁾しかし、いずれにしても「歴史民勢学的」な日本史研究が、今後、ますます多様かつ活発に展開されることを望んで止まないし、その目標は、たとえば、速水の言葉を借りれば、「難しい理屈をこねる前に、当時生きた農民の一日、一年、あるいは一生が自分の目の前に展開できるようにならなければいけない」と要約できるであろう。しかし、庶民が生きる場としての「歴史的空間」についての研究は、ミクロ・デモグラフィーとの関連において、今後、さらに深められるべきだと思われる。

(慶應義塾大学経済学部助手)

注 (95) 日本流の地域主義の所説については、玉野井芳郎の多くの著作があるが、さしあたりここでは、石井雄二「地域主義における『地域』概念化について——玉野井芳郎氏の所説の批判的検討——」『農村研究』67 (1988), 24~36頁を参考までに挙げておく。

(96) 東西ドイツの地域史研究の諸問題については、P. Steinbach, Territorial-oder Regionalgeschichte: Wege der modernen Landesgeschichte. Ein Vergleich der "Blätter für deutsche Landesgeschichte" und des "Jahrbuchs für Regionalgeschichte", in: GG 11 (1985), S. 528-540 において要領よく解説されており、本稿と関連する重要な文献が網羅的に紹介されている。また、その論文でも、K. Blaschkeの貢献は非常に高く評価されており、多くの重要な文献が指摘されている。しかし、ここでは、筆者の "Konfession und Gesellschaft in einem Gewerbezentrum des frühneuzeitlichen Deutschlands: Das Wuppertal (Elberfeld-Barmen) von 1650 bis 1820, Diss. Gießen 1988" を研究するにあたって、出発点としてのキーカテゴリー "Lebenskreis" (人的集団としての生活圏) を与えてくれた、K. Blaschke, Raumordnung und Grenzbildung in der sächsischen Geschichte, in: Grenzbildende Faktoren in der Geschichte. Forschungsberichte des Ausschusses "Historische Raumforschung" der Akademie für Raumforschung und Landesplanung, Hannover 1969, S. 87-112 のみを挙げておく。そこで Blaschke が触れていた信条的境界線の意義についての議論 (Ebd., S. 104) を発展させ、地域信条 (Ortskonfession) について考察を加えたものが、筆者の「ヴッパータール (ウンター・バルメン) における地域信条と社会構成 (1816年)」『三田学会雑誌』81-4 (1989), 89~109頁である。また、因みにベルリン自由大学教授で、国際的に活躍している A. E. Imhof の研究方向は、ドイツ語文化圏でも固有のものであるが、彼の国籍はスイスである。人口史に比べて、歴史人口学の分野では、ドイツ人の研究は意外と少ないのが現状である。それが、ナチ期の人種イデオロギーに対する過剰反応であるかどうかはわからないが、先に挙げた J. Knodel あるいは W. R. Lee に加えて、E. François の研究も重要である。ここでは、さしあたり、E. François, Koblenz im 18. Jahrhundert. Zur Sozial- und Bevölkerungsstruktur einer deutschen Residenzstadt, Göttingen 1982 を挙げておく。

(97) 速水融「コメント、江戸時代の歴史民勢学から」276頁。